

## 基督教学校教育同盟編『キリスト教主義中学校及び 高等学校聖書教科書』(1959年)の内容とその特質

著者	佐々木 勝彦
雑誌名	教会と神学
号	49
ページ	155-203
発行年	2009-11-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00024385/">http://id.nii.ac.jp/1204/00024385/</a>

# 基督教学校教育同盟編『キリスト教主義中学校及び 高等学校聖書教科書』（1959年）の内容とその特質

佐々木 勝彦

## はじめに

われわれはすでに、基督教教育同盟会編『基督教主義中学校及び高等学校宗教教科書』（1949年）、基督教教育同盟会編『基督教主義中学校及び高等学校宗教教科書』（1951年）、さらに基督教学校教育同盟編『キリスト教主義中学校及び高等学校聖書教科書』（1956-58年）の内容と特質について論じた<sup>1)</sup>。本論においては、その後に企画され、中高一貫教育を前提とした基督教学校教育同盟編『キリスト教主義中学校及び高等学校聖書教科書』（1959年）を取り上げ、その内容と特質を明らかにしてみたい。

本シリーズの編集委員及び編集顧問は以下の通りである。

〔編集委員〕

阿部義宗、関根文乃助、本田正一、茂義太郎、二宮源兵、月浦利雄、竹井一夫、溝口靖夫、片山正直、坪井正之、白根新治、芝山 満、末包一夫、佐藤周象、西村次郎、原 忠雄、久保政義、小林 宏、相浦忠雄、水野 誠、川桐トキ子、秋月敏次、山鹿 素、小池文雄、針谷松太郎、小樋井滋、野町 洋、中村正子、水野和夫、岡山好江

〔編集顧問〕

今田 恵，千葉 勇，西村次郎

各項目の構成はこれまでと同じく，a. 発行年次，定価，総頁数，挿入写真枚数等，b. 著者，c. 詳細な目次（但し各目次は，これまでの論文における取り扱いと同様に，必ずしも原文表記のままではなく，なるべく統一的な表記法，本文の中に用いられている聖句の挿入，さらに小項目の一部省略などの編集を行っている），d. 特質，となっている。

## I 中学校用教科書

### (1) (イ) 中学校用，基督教学校教育同盟編『キリスト教入門 — 聖書教科書 I —』新元社

a. 1959 (昭和 34) 年 4 月 5 日 初版発行，90 円，124 頁（付録 1 キリスト教主義学校創立年表，2 キリスト教主義学校統計，基督教学校教育同盟加盟校分布図，聖書名略号一覧，総計 9 頁分を含む），44×14 (1 頁 616 字)，巻頭写真 2 頁，挿絵・写真 16 枚

b. 本田正一執筆

c. 目次

第一部 生命のみなもとである神

第一章 わたしたちの学校 — 学校創立の精神と歴史，二 キリスト教主義学校に学ぶ意義と喜び，第二章 新しい生活 — 神を拝む，二 神に祈る，三 神を讃美する，四 聖書のあらまし 1 聖書とはなんであるか，2 旧約聖書，a 歴史の部，b 文学，c 預言，3 新約聖

書, a 福音書, b 使徒行伝, c 手紙, d ヨハネの黙示録, 五 教会とは何か, 六 イエスを学ぶ意義

## 第二部 神の子イエスの生涯

第一章 イエスの働きと教え — イエスの誕生と少年時代 (マタイ 1・18-2・12, ルカ 2・1-20) 1 イエスの誕生, 2 少年時代 (ルカ 2・40-52), 二 伝道の始め 1 イエスの受洗(マタイ 3・1-17, マルコ 1・1-13, ルカ 3・1-22), 2 イエスの荒野の誘惑 (マタイ 4・1-11, マルコ 1・12-13, ルカ 4・1-13), 三 ガリラヤにて 1 説教 (マタイ 5-7), 2 奇跡, 3 神の国のたとえ話(マタイ 13), 四 北方の旅にて 1 ペテロの告白 (マタイ 16・13-20, マルコ 8・27-33, ルカ 9・18-22), 2 イエスの姿がかわる (マタイ 17・1-8, マルコ 9・2-8, ルカ 9・28-36), 五 エルサレムへ 1 受難の予告, 2 エルサレムへ, 3 よいサマリヤ人 (ルカ 10・25-37), 4 マルタとマリヤ (ルカ 10・38-42), 5 三つのたとえ(ルカ 15), 6 エルサレムまで, 第二章 受難と復活 — 入城 (マタイ 21・1-11, マルコ 11・1-10, ルカ 19・28-44), 二 宮きよめ (マタイ 21・12-17, マルコ 11・15-18, ルカ 19・45-46), 三 最後の教え (マタイ 23・24-25) 1 第一の話 (マタイ 25・1-13), 2 第二の話 (マタイ 25・15-30), 3 第三の話 (マタイ 25・31-46), 四 最後の晩餐とゲッセマネの祈り (マタイ 26・17-46, マルコ 14・12-42, ルカ 22・7-46), 五 裁判 (マタイ 26・57-68, 27・11-31, マルコ 15・2-20, ルカ 23・2-25), 六 十字架とその周囲の人々 (マタイ 27・32-56, マルコ 15・21-41, ルカ 23・26-49, ヨハネ 19・16-30), 七 復活 (マタイ 28・1-20, マルコ 16・1-20, ルカ 24・1-53)

付録

一 キリスト教主義学校創立年表、二 キリスト教主義学校統計、三  
キリスト教主義学校分布図

#### d. 特質

1 本書の新しさは、その「第一章 わたしたちの学校 ― 学校創立の精神と歴史、二 キリスト教主義学校に学ぶ意義と喜び」、さらにその付録に表われている。これまでのシリーズも「基督教学校教育同盟編」となっており、このことを伺わせる説明もあったが、本書のように独立した章を設け、5頁にわたって解説しているのは初めてである。これは明らかに編集委員会の意向を反映していると考えられる。しかしなぜこのときだったのだろうか。編集委員の選定にいたる過程、および執筆方針の決定にいたる過程を知るためにも、議事録の整理が待たれるところである。

「一 学校創立の精神と歴史」によると、キリスト教主義学校の特色はつぎの二つの事柄にある。つまり「その第一は、すべての教育が信仰を土台とし、信仰の人をやしなうことを目あてとすること」、「第二に、この小さな学校は、教会の働きとしてはじめられたのですから、その本当の創立者は、イエス・キリストであるということ」である。

「二 キリスト教主義学校に学ぶ意義と喜び」は、「教育基本法」の歴史的意義と、それが語る「人格の完成」は「キリスト教的人格の完成」に他ならないことを述べ、さらにその目的を達成するために礼拝と聖書科の時間があることを熱く語りかけている。

2 「第二部 神の子イエスの生涯」の構成は、その参照聖句から予想される通り、基本的にマタイ福音書の順序に従って展開されている。ただし、「第一章 五 エルサレムへ 2 エルサレムへ」の箇所で、「こ

こで、ルカによる福音書を中心にして、ひたむきにエルサレムさして行かれるイエスを学びましょう」と述べ、ルカ福音書九章から一五章までの記事を紹介し、「第二章 受難と復活」において再びマタイ福音書に戻っている。

3 第一部「第一章 わたしたちの学校」の項で紹介したように、本書は学校と教会の緊密な関係を強調しており、その姿勢は第一部「第三章 教会とは何か」という独立した項目を設け、説明していることにも表われている。この第三章には、次のような表現もみられ、両者のあるべき関係を指摘している。「教会は、全世界に宣教の責任を負われています（マタイ二八・一九）。……この責任の一部として、教会はキリスト教主義学校教育をしているのです」と。この両者の関係をどう理解するか、キリスト教主義学校にとってそれは自らの存在理由に関わる問題であり、その理解は直接間接に「聖書科」の授業だけでなく、さらに教科書の選択あるいはその記述にも影響する。その点、本書の立場は明確である。

4 手元にある『聖書教科書 I, キリスト教入門』（昭和34年4月5日初版発行）を読む限り、信じられないことが起こっている。それは、18頁で突然「二 悔改めと信仰」の解説が始まり、「三 キリストによる救い」が語られるからである。それはさらに「第三章 人格の形成」へと進み、33頁で突然「(イ) パウロの手紙(十三)」が表われる。最初の部分は、大人が読む限り、多少の抵抗があってもそのまま読み進むことも可能である。明らかに落丁が起こっている。それは目次で言うと、「第一部 新しい生活、第二章 三 神を讃美する」の一部と、それに続く「四 聖書のあらまし」の大部分である。われわれの資料

としているこの教科書にのみ、偶然この落丁が起こったのだろうか。それともその範囲が広く、これにより、翌年つまり 1960（昭和 35）年に「改訂版」出版することになったのだろうか。これを確認するには、編集委員会の議事録によるしかないが、その検証が不可能な現状においては、「改訂版」の内容を検討する道も残されている。これについては、項目を改めて検討してみたい。

5 基督教学校教育同盟編『聖書教科書教授指導書・中学用』創元社（非売品）という資料が残されている。その発行は 1961（昭和 36）年 4 月 10 日となっている。この中の「キリスト教入門（本田正一）」（3-47 頁）の目次は、新生社版の『キリスト教入門—聖書教科書 I—』とまったく同じである。一見これは当然のごとく思われるが、次に取り上げる改訂版の存在を知る者にとって、それは新たな謎となる。その改訂版は、創元社から、この『聖書教科書教授指導書・中学用』の発行された 1961 年の前年に、しかもまったく異なる内容をもつ教科書として出版されているからである。現在のところ、この改訂版のための『教授指導書・中学用』は見つかっていない。

さらに事柄を複雑にしているのは、基督教学校教育同盟編『聖書教科書・教師用書』新元社（非売品）の存在である。この発行年は 1959 年 1 月 25 日であり、それは後に発行された『聖書教科書教授指導書』の中学用（138 頁）と高校用（206 頁）を合わせた形になっている。それらの扱っている範囲も基本的内容も同じであり、その頁数が全部で 60 頁と極端に少ないだけである。この 60 頁のうち中学用は 21 頁だけであり、どうみても中学用と高校用のバランスがとれていない。このことも、わずか二年後に新たな二冊の『聖書教科書教授指導書』を生

み出すきっかけとなったのだろうか。いずれにせよ、1959年版のシリーズが発行される段階ですでに『聖書教科書・教師用書』が完成していた意味は大きい。教育現場にとって、それは大きな力となったはずである。また、この本が新元社から出版されていることは、原本とも言うべき『キリスト教入門—聖書教科書 I—』が新元社から出版されていることから考えて当然である。むしろ謎は、その増補改訂版ともいべき二冊の『聖書教科書教授指導書』が創元社から出版されていることである。

(ロ) 中学校用、一年、基督教学校教育同盟編『キリスト教入門』〔改訂版〕創元社

a. 1960(昭和35)年4月5日 初版発行, 1965(昭和40)年7月発行, 1966(昭和41)年 改訂初版発行, 1967(昭和42)年 改訂2版発行, 160円, 129頁(付録1 キリスト教主義学校創立年表, キリスト教主義学校分布図, キリスト教主義学校統計, 旧約時代のパレスチナの地図, 新約時代のパレスチナの地図, 聖書書名略号一覧, を含む), 44×14(1頁616字), 巻頭写真4枚4頁, 挿絵・写真9枚

b. 本田正一執筆

c. 目次

第一章 あたらしい紀元, 第二章 あなたがたはわたしをだれというか, 第三章 このかたはどういう人なのだろう (一) 神のことは語られるイエス, 第四章 このかたはどういう人なのだろう (二) 神の力により, ふしぎなわざをなされるイエス, 第五章 このかたはどういうひと人なのだろう (三) あがないの主として十字架につかれたイ



エス、第六章 わたしを見たものは、父を見たのである (一) 神、第七章 わたしを見たものは、父を見たのである (二) 神 父なる神、第八章 息を吹きかけて仰せになった「聖霊をうけよ」(一) 聖霊について (一)、第九章 息を吹きかけて仰せになった「聖霊をうけよ」(二) 聖霊について (二)、第十章 神の靈感をうけて書かれたもの (一) 聖書、第十一章 神の靈感をうけて書かれたもの (二) A 旧約聖書 (イ) 律法、第十二章 神の靈感をうけて書かれたもの (三) A 旧約聖書 (ロ) 歴史書、第十三章 神の靈感をうけて書かれたもの (四) A 旧約聖書 (ハ) 詩歌書、第十四章 神の靈感をうけて書かれたもの (五) A 旧約聖書 (ニ) 預言書 (一)、第十五章 神の靈感をうけて書かれたもの (六) A 旧約聖書 (ホ) 預言書 (二)、第十六章 神の靈感をうけて書かれたもの (七) B 新約聖書 (イ) 福音書・使徒行伝、第十七章 神の靈感をうけて書かれたもの (八) B 新約聖書 (ロ) パウロの手紙、第十八章 神の靈感をうけて書かれたもの (九) B 新約聖書 (ハ) ヘブル人への手紙から黙示録、第十九章 わたしもそのなかにいる (一) 教会について (一)、第二十章 わたしもそのなかにいる (二) 教会について (二) 礼拝・説教・祈り・さんび、第二十一章 わたしもそのなかにいる (三) 教会について (三) 礼典・主の日、第二十二章 わたしもそのなかにいる (四) 教会について (四) 教派、第二十三章 わたしもそのなかにいる (五) 教会について (五) 使命と行事、第二十四章 わたしもそのなかにいる (六) 教会について (六) 初代教会の生活、第二十五章 聖書にしるされた人間 (一) 創造・墮罪・流離 (さすらい)、第二十六章 聖書にしるされた人間 (二) 新生者・神の作品、第二十七章 聖書にし

るされた人間関係 (一), 第二十八章 聖書にしるされた人間関係 (二), 第二十九章 人と物 (一) 物は人のためにつくられ, 人は物の主である, 第三十章 人と物 (二) 人は物の管理人である, むすび  
d.

1 本書の〔改訂版〕とは何を意味するのだろうか。同一執筆者であるとの前提で, 常識的に考えるならば, それは直前で取り上げた基督教学校教育同盟会編『キリスト教入門』の内容を一部訂正したものということになる。ところが, その目次を比較すると明らかなように, まったく別の構成になっている。極端な表現をすると, 同一なのは執筆者と書名だけである。一体何が起こったのであろうか。この間の事情を確かめるには, 編集委員会議事録等の資料の整理を待つほかほかないが, 少なくとも次のことが分かっている。1959年初版の『キリスト教入門』が, 1986年の時点でもなお使用されていることである。つまりそれは『キリスト教入門』(1959(昭和34)年4月5日 第1版第1刷発行, 1986(昭和61)年4月10日 第1版第29冊発行, 定価680円, 創元社)として出版されている。他方, 改訂版の方も, 1968年の時点で, 『キリスト教入門』(1960(昭和35)年4月5日 初版発行, 1968(昭和43)年4月5日 改訂版3版発行, 定価160円, 創元社)として発行されている。

これらの教科書の奥付から両者の関係を読み取ろうとすると, また新たな問題が生じてくる。1959年版の『キリスト教入門』の奥付と1986年版の『キリスト教入門』の奥付によると, その初版ないし第1版の発行期日は1959(昭和34)年4月5日であり, この点で両者に違いは見られない。次に1967年発行の改訂版『キリスト教入門』の奥付

と、1968年発行の改訂版『キリスト教入門』の奥付を比べると、その初版発行及び改訂初版発行の日付は同じである。改訂版の初版発行は1960(昭和35)年4月5日、そしてこの初版の改訂初版の発行は1966(昭和41)年4月5日である。この表記から考えると、1960(昭和35)年4月5日の段階で、すでに前年に発行されている1959年版『キリスト教入門』と、このときに発行され、それから六年後に改訂された『キリスト教入門』という二冊の本があったことになる。これも資料の整理を待って答えを出すしかないが、もし1968年4月5日の段階で二種類の『キリスト教入門』が存在したとすれば、しかもその執筆者がもし同一であるとすれば、なぜそのようなことが起こったのか、謎は深まるばかりである。この当時の編集委員会は一切何を議論していたのだろうか。

この謎をさらに深めるのは、基督教学校教育同盟の名前で、1959年4月5日に『聖書教科書』(創元社)が出版されている事実である。この教科書は「旧約聖書の教え」(122頁)と「新約聖書の教え」(153頁)から成る大部の書物である。全体の最後に「わたしたちは、この一年間新約の教えを学んできた」(147頁)とあることから考えて、二年間で旧新約全体の学びを終了することを想定していたようである。この教科書の正式表題は基督教学校教育同盟編『桃山学院高等学校宗教教科書 聖書概説』となっており、これは特定の高等学校のための教科書であることがわかる。本来なら、今回取り上げているシリーズの高校生用教科書のところで論ずるべきかもしれないが、ここであえてこの教科書を紹介したのは、基督教学校教育同盟は、1959年の時点で、本シリーズと異なるタイプの教科書出版を認めていたことを確認するた

めである。つまりこれにより、同一の執筆者による、同一タイトルの、しかも異なる内容の教科書が相次いで発行されている事実を説明する可能性が開かれるからである。なお最終的な判断を下すためには、編集会議等の議事録の整理を待たなければならないことは言うまでもない。なお、『聖書概説』（創元社）の第2版は1960（昭和35）年4月5日に発行されている。

2 改訂版の目次をみて驚くのは、最初にあった「第一章 わたしたちの学校」が完全に削除されていることである。ただし付録の「キリスト教主義学校創立年表、キリスト教主義学校分布図、キリスト教主義学校統計」だけは残されている。二年の間に二冊の教科書が発行されるためには、常識的に考えて、ほぼ同時期に最終原稿ができていたはずである。ここで、この改訂版の初版の内容を確認する必要が出てくる。もしもこの削除が初版ではなく、改訂版の初版(1966(昭和41)年4月5日 発行)において初めて起こったとすれば、それまでの六年間の経験を踏まえて、意図的に行われた可能性も出てくるからである。残念ながらこれを確認する資料を筆者は持ち合わせていない。

3 改訂版の目次が示す通り、その構成は組織神学的関心に貫かれている。キリスト論→神論→聖霊論→聖書論→教会論→人間論、という順序になっており、イエスの生涯に関する記述を前著と比較するとき、その違いは一目瞭然となる。すでに指摘した通り、前著はマタイ福音書の順序を基本とし、その中にルカ福音書を組み合わせ話を展開していたが、改訂版では同じマタイ福音書からの聖句引用を基本としつつも、マタイ福音書一六章の「ペテロの信仰告白」から始め(第二章)、執筆者の組織神学的関心あるいは新約聖書神学的関心に従ってその順

所を並べ替えている。例えば、第三章以下の冒頭聖句を並べてみると、次のようになっている。マタイ 7・28-29 → マタイ 8・26-27 → マタイ 27・54 → ヨハネ 1・18, 14・8-9 → マタイ 6・31-33。第八章と第九章の聖霊については、ヨハネ 20・21-22 と使徒行伝 19・1-2 の聖句があげられている。

では、このような組織神学的関心に基づく構成はどのように評価されたのだろうか。しかもこれが、中学一年生を対象とする『キリスト教入門』の構成として、はたしてふさわしいのかどうかも問われたはずである。

結果として、同一執筆者が異なる二つの『キリスト教入門』を残したことに、この問題を解くヒントがある。これが現段階における論者の答えである。執筆者は、この教科書がどのような場面で使用されることを考えていたのだろうか。ふたつの『キリスト教入門』が生まれる背景には、執筆者側の関心だけでなく、この使用場面に関する何らかの共通理解があったはずである。さもなければ二つの教科書が共に「キリスト教学校教育同盟編」とはならなかったであろう。例えば、教会のような場を想定するのか、教員も学習者もほぼ非キリスト者であるような学校を想定するのか、あるいは教員の中にも学習者の中にもかなりの数のキリスト者が存在するような学校を考えるのか、さらには伝統的な「神学科」のような養成機関を念頭に置くのか。これによって、その答えはかなり変わってくる。

この段階で、編集委員会は、あの『桃山学院高等学校宗教教科書』の存在が示唆するように、かなり柔軟に対応していたと考えられる。ただしこれが意図的なものであったのか、それともただ意見がまとまら

なかった結果にすぎないのか。これも当時の資料によって確かめる他ない問題である。

4 「学校礼拝」を初めて経験する新入生に対する配慮がまったくみられないのは、なぜだろうか。その奥付には、明確に「聖書教科書Ⅰ」と記されているだけに、どうしてもこの疑問を抑えることが出来ない。

5 1949(昭和34)版には「課題」の項目があったが、改訂版には「注」があるだけで、それが完全になくなっている。なぜだろうか。これでは、学習者に語りかけという性格を失うことになるのではないだろうか。

(2) (イ) 中学校用、二年、基督教学校教育同盟編『旧約聖書の教え — 聖書教科書Ⅱ —』新元社

a. 1959(昭和34)年4月5日初版発行、90 円、121 頁(付録1 旧約聖書時代年表、2 地図(現在の中近東と旧約時代の中近東)、3 聖書名略号一覧、総計10 頁分を含む)、44×14(1 頁616 字)、巻頭写真3 枚2 頁、挿絵・写真19 枚

b. 関根文之助

c. 目次

第一章 旧約聖書について — 旧約の時代、二 旧約から新約へ、三 旧約聖書の分類、第二章 創世時代 — 万物の創造(創1・2-3)、二 アダムとエバ(創2, 3)、失楽園、三 ノアの大洪水(創6-9)、四 バベルの塔(創11)、第三章 族長時代 — アブラハム(創11・27-13, 18, 19, 21, 22)、二 ヤコブとエサウ(創25・19, 27, 28, 32, 33)、三 ヨセフ(創37, 39-47, 50)、ヨセフと兄たち(創), 第四章 出エ

ジブト時代 — モーセ(出1-3, 5-14・20, 申命記5), ミケランジェロの作品, ある日のミケランジェロ, 二 ヨシュア(出17, 民10, 13, 25, 申命記34, ヨシュア2-4, 6-11), 十二の石塚, 第五章 士師時代 — ギデオンとサムソン(士師6-8, 14-16), 二 サムエル(Iサム1, 3, 4, 7), 国際ギデオン協会の由来, 第六章 王国時代 — サウルとダビデ(Iサム9-11, 15-17, 20, 24, 31, IIサム1-5, 8, 11, 12, 15, 18, II列王1), 二 ソロモン(II列王2, 3, 6-8, 10, 11), 詩編について, 箴言について, 第七章 分裂王国時代 — エリヤ(II列王12, 17-19, 21), 二 エリシヤ(II列王1-5), 三 アモス(II列王14, アモス5, 6), 四 ホセア(II列王15), 五 イザヤ(イザヤ1, 6), 第八章 捕囚時代 — ダニエル(ダニ1), 夢をとくダニエル(劇), バビロンの川のほとり, 二 エレミヤ(エレ1, 5, 7), 三 エゼキエル(エゼ14-20), 四 第二イザヤ(イザ40-55), 第九章 復興時代 — 解放と帰国(エズラ1-3), 二 神殿の再建(エズラ3-5, ハガイ1, 2), 第十章 預言者の使命 — アモス(アモス5), 二 ホセア(ホセア2, 6, 14), 三 イザヤ(イザヤ7-9, 35), 四 エレミア(エレ5-7), 五 エゼキエル(エゼ17), 六 第二イザヤ(イザヤ40), 旧約聖書を取材とした音楽, 第十一 その他の物語 — ルツ(ルツ1-4), 田園画家ミレー, 二 エステル(エステル1-10), 三 ヨブ(ヨブ1-42), 四 ヨナ(ヨナ1-4)

付録 旧約聖書時代年表および地図

(ロ) 中学校用, 二年, キリスト教学校教育同盟編『旧約聖書の教え — 聖書教科書 II —』創元社

a. 1959 (昭和34) 年4月5日 初版発行, 1966 (昭和41) 年4月5日 第2版第1冊発行, 1987 (昭和62) 年4月5日 第2版第24冊発行, 680円, 135頁 (付録1 旧約聖書時代年表, 2 地図 (旧約時代のパレスチナ, バビロニア帝国, 旧約時代のエジプト及びメソポタミヤ, 現在の中近東と旧約時代の中近東), 3 聖書書名略号一覧, 総計12頁分を含む), 44×14(1頁616字), 巻頭写真7枚4頁, 挿絵・写真32枚

b. 関根文之助

c. 目次

第一章 旧約聖書について — 旧約の時代, 二 旧約から新約へ, 三 旧約聖書の分類, 第二章 創世時代 (一) (創1・1) (創1・27), 一 万物の創造 (創1・2-3), 二 アダムとエバ (創2, 3), 第三章 創世時代 (二) (創6・22) — ノアの大洪水 (創6・9・19), 二 バベルの塔 (創11), 第四章 族長時代 (一) (創12・1-4), 一 アブラハム (創11・27-13, 14・13-15・18, 18, 19, 21, 22), 第五章 族長時代 (二) (創28・16-17), 一 ヤコブとエサウ (創25・19, 27, 28, 32, 33), 第六章 族長時代 (三) (創41・38-40), 一 ヨセフのおいたち (創37・1-2, 37・12-36, 39・1-23), 二 獄屋のヨセフ (創39・20-21, 40), 三 獄屋からエジプト全国につかさへ 第七章 族長時代 (四) (創45・7-8), 一 穀物を求めて (創42), 二 ふたたびエジプトへ (創43-46, 47・27-31, 50), 第八章 出エジプト時代 (一) (出3・12), 一 モーセの時代とそのおいたち (出1-3), 二 モーセ



の召命(出3),第九章 出エジプト時代(二)(出13・21-22),一 エジプトにおけるモーセ(出5,12,13・17-22,14・1-18),二 雲の柱火の柱(出13・17-22,14・1-18),第十章 出エジプト時代(三)(出19・5),一 シナイ山へ(出15・22-27,16,17),二 シナイ山のふもとに着く(出19,20・3-17,32),第十一章 出エジプト時代(四)(ヨシュア24・14),一 ヨシュア(出17),二 ヨルダン渡河とエリコ城攻略(ヨシュア2・3-4,6),第十二章 士師時代(一)(士師16・28),一 ギデオンとサムソン(士師6-8,14-16),第十三章 士師時代(二)(Iサム3・9),一 サムエル(Iサム1,3,4,7),第十四章 王国時代(一)(I列王2・3),一 ペリシテ人との戦い(Iサム13,14),二 サウル,サムエルの命にそむく(Iサム15),三 サウル,悪霊になやまされる(Iサム16),第十五章 王国時代(二)(詩51・17),一 ダビデのおいたち(Iサム16),二 ダビデとゴリアテ(Iサム17),三 全イスラエルの王(Iサム16,20,21,24,IIサム2-8),四 ダビデの晩年(IIサム15,18,II列王1),第十六章 王国時代(三)(I列王3・9),一 ソロモンの知恵(II列王3,10),二 ソロモンの事績(I列王6-8),三 ソロモンの栄華と晩年(I列王11,21),第十七章 分裂王国時代(一)(アモス3・7),一 旧約宗教の中心,二 預言者の出現,三 預言者の意義と任務,四 先見者・神の人,第十八章 分裂王国時代(二)(I列王18・37),一 時代とその動き(I列王11),二 民族の危機(I列王18,22,II列王1),三 祈りの戦い(I列王8,18,19),第十九章 分裂王国時代(三)(アモス5・24)一 記述預言者(II列王14,アモス1・5-7),二 正義と公道(アモス2・5),三 唯一神教の確立(アモス1-2・9),四 啓示

と審判(アモス 2-4, 7, 8), 第二十章 分裂王国時代 (四) (ホセア 12・9), 一 時代とその動向 (II 列王 15), 二 神の愛 (ホセア 1), 三 愛の認識 (ホセア 6), 四 偶像排撃と政治改革 (I 列王 12, ホセア 7, 8), 五 神と選民の歴史, 第二十一章 分裂王国時代 (五) (エレ 2・13), 一 最大の預言者 (エレ 1), 二 ヨシアの宗教改革 (II 列王 22, 23, エレ 7, 8, 11), 三 改革の逆転, 第二十二章 分裂王国時代 (六) (エレ 17・9), 一 神殿破壊の預言 (エレ 7), 二 国家と宗教 (エレ 7), 三 苦境に立つ (エレ 11, 15, 17, 20), 四 エルサレム包囲 (II 列王 24, 25, エレ 24, 27, 40), 第二十三章 分裂王国時代 (七) (エゼ 36・23), 一 過渡期の預言者 (エゼ 14, 24, 40), 二 祭司的関心 (エゼ 1-3), 三 神観 (エゼ 1, 6, 20, 26, 28, 36, 39), 四 神の霊 (エゼ 2, 36, 37, 40), 五 罪の個人的責任 (エゼ 16, 18, 34, 37, 40, 48), 第二十四章 分裂王国時代 (八) (イザヤ 9・6), 一 贖罪と召命 (II 列王 15・1-7, イザ 6), 二 インマヌエルの預言 (イザ 7), 三 「残りの者」の思想 (イザ 10), 四 エルサレム包囲 (イザ 20), 第二十五章 分裂王国時代 (九) (イザ 40・1, 40・8), 一 慰めと励まし (イザ 40), 二 イスラエルの救い (イザ 42, 44, 45), 三 唯一神の信仰 (イザ 40, 41, 43, 44, 48), 四 「主のしもべ」の歌 (42・1-4, 49・1-6, 50・4-9, 52・13-53・12), 第二十六章 捕囚時代 (エレ 42・6), 一 時代と背景 (ダニ 11), 二 神の義 (ダニ 4), 三 ダニエル書の内容 (ダニ 1-12), 四 終末的歴史観 (ダニ 2, 7, 12), 第二十七章 復興時代 (ゼカ 1・3), 一 解放と帰国 (エズ 1-3), 二 神殿の再建 (エズ 3-5, ハガ 1, 2), 三 ふたりの預言者 (ネヘ 2, 3, 5, 6, 8, 9, エズ 9), 第二十八章 その他の物語 (ルツ 1・16), 一 ナ

オミとルツ (ルツ 1), ニ ルツの孝養 (ルツ 1), 三 ルツ, 落穂を拾う (ルツ 2), 四 ルツ, ボアズの妻となる (ルツ 4), 第二十九章 その他の物語 (二) (エステル 4・16), 一 アハシュエロス王の酒宴 (エステル 1), ニ 王妃ワシテの不従順 (エステル 2), 三 ハマンの計画 (エステル 3, 4), 四 エステル立つ (エステル 4, 5), 五 エステル, ユダヤ人を救う (エステル 5, 6), 六 ユダヤ人救われる (エステル 7, 8), 第三十章 その他の物語 (三) (ヨブ 5・17), (ヨナ 2・8), 一 ヨブの信仰 (ヨブ 1, 2), ニ 友人との大論戦 (ヨブ 3-42), 三 預言者ヨナ (ヨナ 1-4), 四 「旧約聖書の教え」の終わりに  
付録 旧約聖書時代年表および地図

#### d. 特質

ここでは、これまでの形式に従わず、(イ)と(ロ)の教科書を対比しつつ、双方の特質を考察することにする。

1 関根文乃助の名前は、著者及び執筆者としてすでに三回登場している。つまり、浅野・関根共著『旧約の宗教』(1949), 関根執筆『イエスの生まれるまで — 旧約 —』(1951), 関根執筆『イエスの生まれるまで — 旧約の時代 —』(1957)の三冊である。これに1959に発行された(イ)と(ロ)を加えると、実に五回にもなる。これは基督教教育同盟会及び基督教学校教育同盟が編集した教科書の中でも、際立つ回数である。関根の影響力の大きさを物語っている。

2 (イ)と(ロ)の発行年は共に1959(昭和34)年4月5日である。前者の発行所が新元社、後者の発行所が創元社である。前項において、同一執筆者による、しかも内容の異なる二冊の教科書が執筆されたことを紹介し、その理由を考えてみたが、ここでも同じような問題が起

こっている。発行所も異なる点で、中学一年生用教科書のケースと同じである。ただしここにも資料上の問題がある。(ロ)の奥付によると、確かに第1版の発行は1959年4月5日であるが、1966年4月5日に第2版が発行されている。われわれの参照した資料はその第2版第24刷であり、その発行年は1987年と記されている。したがって、(ロ)の記述内容はそのまま1959年初版のものと同一であるとみなす根拠は存在しなく、同一執筆者による、内容の異なる二冊の教科書は、改訂の結果生まれたと想定することもできる。

(イ)と(ロ)の内容はほぼ同じであり、二種類の中学一年生用教科書の間にあったような差異はみられない。しかし後に述べるように、細部においてはかなり異なっている。このような結果に至るまでに、一体どんな議論があったのだろうか。

3 (イ)と(ロ)の目次を比べると、(イ)は全体で十一章から構成されているのに対し、(ロ)は三十章から成っている。したがって内容が変わらないとすれば、後者の方は細分化されているだけであり、事実、各章の表題は同じである。両者で大きく異なるのは、(ロ)において次の項目が削除されていることである。「失樂園」「ヨセフと兄たち(劇)」「ミケランジェロの作品」「ある日のミケランジェロ」「十二の石塚」「国際ギデオン協会の由来」「詩編について」「箴言について」「夢をとくダニエル(劇)」「バビロンの川のほとり」「旧約聖書を取材とした音楽」「田園画家ミレー」。これらの項目は、学習者が旧約聖書の内容を少しでも身近に感じられるようにとの期待から、設けられたと考えられる。それらの素材は、文学、演劇、音楽、絵画といった幅広い分野から収集されている。

ただしこの削除の事実から、(ロ) は学習者の関心をまったく無視している、と決めつけることはできない。巻頭写真及び挿絵・写真の枚数は、(ロ)の方が圧倒的に多いからである。巻頭写真の枚数の比率は、(イ) 3枚・2頁対 (ロ) 7枚・4頁に、挿絵・写真の枚数の比率は、(イ) 19枚対 (ロ) 32枚になっている。

4 『イエスの生まれるまで—旧約—』を取り上げた際に、各項目の記述が短く、辞書のように簡潔であることを指摘した。ところが(イ)と(ロ)においては、これと比べると、各項目の記述がはるかに長い。しかも(イ)の方の章数が少ないことから推測される通り、(イ)の方の記述が(ロ)の記述よりも長くなっている。また『イエスの生まれるまで—旧約—』にあった「旧約聖書の地理」の項目が、双方において完全に削除されている。

5 『イエスの生まれるまで—旧約—』には課題の項目がなく、『イエスの生まれるまで—旧約の時代—』にはそれが入っていることを指摘したが、(イ)と(ロ)ではその扱いが異なっている。(イ)は従来型の「課題」に加えて「注」を設けている。さらに必要に応じて人名及び事項を上げ、その解説を行っている。これに対し(ロ)は、「注」の他に、「課題」に代わる「応用」の項目を設け、人名及び事項の説明を削除している。これにより、改訂のための努力がなされていたことがわかる。

6 (イ)と(ロ)双方の本文の後に「旧約聖書時代年表」「地図」「聖書書名略号一覧」が付け加えられている。しかし「キリスト教学校教育同盟編」であることを強く印象付けた中学一年生用教科書の付録は、再録されていない。

7 現在,(ロ)の版は,少なくとも1992年4月5日第2版29刷(728円)まで,継続出版されたことが分かっている。このようにロングセラーとなった理由はどこにあったのだろうか。同一執筆者による五回にわたる書き直しが功を奏したのだろうか。それとももっと別の出版事情があったのだろうか。教育現場の声があったのだろうか。

8 『聖書教科書・教師用書』(1959 年)の中で関根文乃助は,執筆方針についてこう述べている。「聖書科カリキュラム中学校用第二学年に準拠して,執筆したものである。聖書そのものを読ませ,親しませ,学ばせるということに留意し,聖書をひもときつつ,本書を用いるという点に,主眼を置いている」(9 頁)と。

(3) 中学校用,三年,基督教学校教育同盟編『新約聖書の教え — 聖書教科書 III —』新元社

a. 1959(昭和34)年4月5日初版発行,90円,153頁(地図(パレスチナ・九州比較図,ガリラヤ湖・東京付近比較図),参考書,年表,聖書名略号一覧,総計4頁分を含む),44×14(1頁616字),巻頭写真3枚2頁,挿絵・写真16枚

b. 茂義太郎

c. 目次

主題一 はじめに

1 旧約と新約の関係,2 新約聖書の背景(歴史・地理・宗教),一年の学習計画

主題二 イエスの宣教活動

第一章 宣教開始 第1節 福音のはじめ 1 バプテスマのヨハネの

運動 (マルコ 1・1-8), 2 イエスの受洗 (マルコ 1・9-11), 3 荒野の  
 ころみ (マタイ 4・1-11), 第2節 神の国の到来の告知 1 神の国  
 の到来の告知 (マルコ 1・14-15), 2 最初のでし (マルコ 1・16-20),  
 3 会堂における福音宣教 (マルコ 1・21-28), 第3節 神の国のしるし  
 としての奇跡 1 イエスの奇跡の特徴, 2 神の国のしるしとしての奇  
 跡 (マタイ 11・2-6, 12・28), 3 神の国はあなたがたのうちにある (ル  
 カ 17・20-21)

第二章 その群れとともに 第1節 反対者の出現 1 反対者の出  
 現, 2 十二でしをえらぶ (マルコ 3・13-19), 第2節 神の国の教え 1  
 たとえばなし (マルコ 4・1-33), 2 真の幸福 (マタイ 5・1-12), 3 人々  
 の無理解 (マルコ 6・14-29, ヨハネ 6・15, ルカ 10・13-16)

### 主題三 受難のメシヤ

第一章 イエスこそキリスト 1 わたしをだれというか (マルコ 8・  
 27-30), 2 十字架への道 (マルコ 8・34-37, 10・35-45), 3 山上の変  
 貌 (マルコ 9・2-29), 第二章 十字架と復活の主 第1節 エルサレ  
 ムにて 1 「ダビデの子」 (マルコ 10・46-52), 2 エルサレム入城 (マ  
 ルコ 11・1-11), 3 宮きよめ (マルコ 11・15-18), 4 エルサレムでの論  
 争, 5 レプタ二つ (マルコ 12・41-45), 第2節 苦難のメシヤ 1 エ  
 ルサレムに関する預言 (マルコ 13・1-2), 2 ユダの裏切り (マルコ 14・  
 10-11), 3 最後の晩餐 (マルコ 14・17-26), 4 ゲッセマネの祈り (マ  
 ルコ 14・32-42), 第3節 十字架と復活 1 裁判と宣告 (マルコ 14・  
 43-15・41), 2 十字架上のイエス (ルカ 23・39-43, ヨハネ 19・28-30),  
 3 空虚な墓 (マルコ 16・1-16), 4 復活のキリスト (ルカ 24・13-32,  
 マタイ 28・16-20)

#### 主題四 使徒たちの宣教活動

第一章 初代教会の姿 第1節 教会の成立 1 昇天、祈りの群れ(使1・3-14), 2 ペンテコステ(使2・1-13), 3 ペテロの活動(使2・14-36), 4 初代教会の生活(使2・37-47), 第2節 使徒たちの働き 1 バルナバ(使4・36-37), 2 ピリポ(使8・4-39), 3 ステパノ(使6・1-7・1, 7・54-8・1), 第二章 パウロの生涯 第1節 サウロのおいたち 1 サウロのおいたち(使22・1-5, ピリピ3・5-6), 2 迫害者サウロ(ピリピ3・5-6, ガラ1・13), 3 パウロの回心(使9・1-19), 第2節 パウロの伝道活動 1 アンテオケ教会とパウロの第一伝道旅行(使13・1-3), 2 エルサレム会議とパウロの第二伝道旅行, 3 パウロの第三伝道旅行(使18・23, 20・17-38), 第3節 パウロの手紙と最後 1 パウロの手紙(ガラ1・1-10), 2 パウロの最後(使27・1-28・30, ピリピ1・1-11)

#### 主題五 その後の宣教活動

第一章 迫害異端とたたかう教会の歩み 1 ネロの迫害(マルコ8・34-36, ルカ1・1-4), 2 ドミチアヌスらによる迫害(I ペテロ4・12-13, ヘブル12・1-2, 黙示録22・16-21), 第二章 グノーシスなどとのたたかい 1 グノーシス主義との戦い(I ヨハネ4・2-3), 2 ヘレニズムとの接触(ヨハネ1・1-18)

#### 主題六 まとめ

1 宗教改革と聖書(ローマ1・17), 2 聖書とわれわれの生くべき方向,  
3 一年間のまとめ

地図, 年表, 参考書

#### d. 特質



1 執筆者茂義太郎には、すでに三冊の著書がある。つまり 1949 年には『キリスト教の起源』を、1951 年には原野駿雄と共著で『イエスと使徒たち』を、そして 1957 年にはこの改訂版『イエスと使徒たち—新約の時代—』を、それぞれ出版している。この三冊の中で 1951 年の教科書と 1957 年の教科書は共著なので、ここでは特に最初の教科書を念頭に置く必要がある。また茂義太郎は、前項で取り上げた関根文乃助と同様に、基督教教育同盟会編『基督教主義中学及び高等学校宗教教科書』シリーズの企画編集委員会の一員であったことも忘れてはならない。これまでの流れを十分承知の上で本書を執筆している可能性が高いからである。

2 「主題 一 はじめに、1 旧約と新約の関係、2 新約聖書の背景（歴史・地理・宗教）、一年の学習計画」の部分は、『キリスト教の起源』にも、また『イエスと使徒たち』とその改訂版にもなかった部分である。

3 各節の前に「要旨」の欄が設けられている。学習者は、あらかじめ学びの概要を知ることができたと共に、最後にまとめとして利用することもできたはずである。しかもこの要旨全体が線によって縁取りされているため、本を開くと、「要旨」が学習者の目に飛び込んでくる効果が期待された。また視覚的効果の面で斬新なのは、写真の間に、版画のようなデザイン化された図版を入れたことである。これも学習者にとって新鮮であるだけでなく、その他の教科書との違いを際立たせたと思われる。

4 印象的なのは、イエスについて語る際に、原野駿雄著『イエスの生涯』（1949）や『イエスと使徒たち』及びその改訂版のように、「イ

イエスの生い立ち」から始めなかったことである。「主題 二 イエスの宣教活動」は、マルコ福音書の「バプテスマのヨハネの運動」から始めている。執筆者は、明らかに文献批評学的視点を意識し、マルコ福音書の流れを基本において、その間に他の福音書の記事を組み込むという形式を採用している。「主題 四 使徒たちの宣教活動」の記述は、当然のことながら「使徒行伝」の記事に基づいており、これとの関連で、ルカ福音書を基本に据えることもできたはずである。しかし執筆者はマルコ福音書を基本にしており、ここに執筆者の意図を窺うことができる。その結果、イエスの誕生物語に関する記述はなく、ヨハネ福音書の記事に関する解説もわずかである。

5 「主題 四 使徒たちの宣教活動」の主な内容は、『キリスト教の起源』と『イエスと使徒たち』の関連箇所の内容とほぼ同じである。他方、「主題 五 その後の宣教活動」（第一章 迫害異端とたたかう教会の歩み 1 ネロの迫害（マルコ 8・34-36、ルカ 1・1-4）、2 ドミチアヌスらによる迫害（I ペテロ 4・12-13、ヘブル 12・1-2、黙示録 22・16-21）、第二章 グノーシスなどとのたたかい 1 グノーシス主義との戦い（I ヨハネ 4・2-3）、2 ヘレニズムとの接触（ヨハネ 1・1-18））と、「主題 六 まとめ」（1 宗教改革と聖書（ローマ 1・17）、2 聖書とわれわれの生くべき方向、3 一年間のまとめ）は、これまでの教科書にはなかった内容である。特に主題五の「第二章 グノーシスなどとのたたかい」は、ヨハネの手紙の背後にある問題を指摘し、さらにヨハネ福音書をこの視点から読むべきことを示唆している。

6 現場の教師は、本書を手にしたとき、その「参考」「研究」「注」「生活との関連」「反省」「質問」「予備問題」等の項目に注目したはず

である。それらは「教師の手引」としての役割を果たしており、ある箇所の「注」などは、細かな字で一頁を超える内容となっている（85-87 頁）。これらの配慮は、今回が初めてではなく、すでに『キリスト教の起源』にもみられた。そこでは「注」「課題」「研究題目」「反省」等と呼ばれていた。

7 「主題 三 受難のメシア」の第一章までは、各節の「要旨」の前にさらに「聖句」が上げられているケースが多い。それはキーワードのような役割を果たしており、暗唱聖句という意味も持たせたのだろうか。

8 他の教科書と比べて、最初に「一年間の学習計画」、そして最後に「一年間のまとめ」の項目があるように、カリキュラムの意識が前面に出てきている。

9 茂義太郎は『聖書教科書・教師用書』（1959 年）および『聖書教科書教授用指導書・中学用』（1961 年）において、教育同盟編聖書科カリキュラム中学第三学年は難しすぎることを、しかしあえてそれに忠実に従ったこと、そして委員会の申し合わせにしたがってワークブック方式にしたことを述べている。これにより、少なくとも編集者及び執筆者の意図がどこにあるのかが明らかになる。

## II 高等学校用教科書

### (4) 高等学校用，新高校一年用，基督教学校教育同盟編『聖書入門 — 聖書教科書 IV —』新元社

a. 1959（昭和 34）年 4 月 5 日初版発行，90 円，123 頁（地図（旧

約時代のパレスチナ, 新約時代のパレスチナ, 旧約時代のエジプト及びメソポタミア, パウロの旅行行程), 聖書名略号一覧, 総計6頁分を含む), 44×14(1頁616字), 巻頭写真1枚1頁, 挿絵・写真10枚

b. 二宮源兵

c. 目次

第一部 キリスト教的生活と聖書

第一章 キリスト教的生活の目的, 第二章 キリスト教的生活 一 祈りの生活 1 祈りの意味, 2 祈りの要素, 二 賛美の生活 1 賛美する心, 2 キリスト教と賛美歌, 3 キリスト教音楽の歴史, 4 わが国の賛美歌, 三 神を信ずる生活 1 旧約聖書の神, 2 新約聖書の神, 3 「父なる神」の本質, 4 三位一体としての神, 四 イエス・キリストに従う生活, 五 聖霊に導かれる生活, 六 教会生活 第三章 聖書の意味と価値 1 聖書の意味, 2 聖書の成立, 3 聖書の価値 ① 聖書の歴史的価値, ② 聖書の文学的価値, ③ 聖書の芸術的価値, ④ 聖書の道徳的価値, ⑤ 聖書の宗教的価値

第二部 聖書における神の啓示

第一章 旧約聖書における神の啓示 第一節 神の啓示としての聖書 一 律法の意味, 二 律法書の特徴 1 天地創造説, 2 恵みの祝福と契約, 3 最初の律法と最初の罪, 4 律法の種類, 三 律法書の歴史的部分, 第二節 神の啓示としての預言 一 預言の意味, 二 預言者の活動, 三 預言書の特徴と区分, 四 預言書の主要思想 1「残りの者」, 2「メシヤ」, 3 贖罪の受難, 4 新天新地, 5 神の摂理, 6 改革的精神, 7 犠牲的愛, 第三節 神の啓示としての宗教経験 一 宗教的経験の種々相, 二 諸書の特徴とその区分, 第二章 新約聖書におけ

る神の啓示 第一節 神の啓示としてのイエス・キリスト — イエス・キリスト, 二 福音書の成立ち, 三 福音書の特徴 1 四福音書, 2 イエスの教訓, 3 イエスの十字架, 4 イエスの復活, 第二節 神の啓示としての使徒たちの活動 — 使徒たちとその活動, 二 使徒行伝とその特徴 1 ペンテコストにおける信仰復興運動, 2 ペテロの宣教活動, 3 ステパノの殉教, 4 パウロの回心とその宣教活動, 第三節 神の啓示としての教会 — 使徒たちと教会, 二 使徒たちの手紙とその特徴 1 パウロの書簡とその特徴, 2 牧会書簡とその特徴, 3 共同書簡とその特徴, 第四節 神の啓示としての黙示 — 黙示の意味, 二 ヨハネの黙示録の成立ちと特徴, 三 ヨハネの黙示録の内容

結論 神の啓示としての聖書

#### d. 特質

1 二宮源兵には、すでに今田恵との共著で『キリスト教入門』という著書がある。これは、入学したばかりの中学一年生を対象としていたため、この教科書と『聖書入門』を単純に比較することはできない。しかしこの『聖書入門』を、高校に進学したばかりの一年生を対象とする教科書として捉えなおすと、どちらも基本中の基本を語ろうとしている点で共通している。中高一貫教育がどの程度実現していたか、といったその現場の状況によって、この教科書の評価もかなりちがってくる。

2 「第一部 キリスト教的生活と聖書 第一章 キリスト教的生活の目的, 第二章 キリスト教的生活」は、32 頁余りの中に、「キリスト者」の大切にしている「祈り」「讃美」「聖書」「神・キリスト・聖霊」「教会」に関する記述をコンパクトにまとめている。たとえ教会の礼拝

への出席が義務ではなかったとしても、学校礼拝への出席は義務であったと考えられる。そしてそれが礼拝であるかぎり、そこで経験することがらについて、発達年齢に応じた説明が改めて必要になったはずである。この教科書はそのニーズに答えており、例えば、「祈り」についての説明は見事である。

3 第二部の表題は「聖書おける神の啓示」となっている。この表題には執筆者の意図が明確に現れている。聖書は、どこまでもキリスト教会の正典として取り扱われるべきなのである。この第二部に入る前に、「第一部 第三章 聖書の意味と価値、三 聖書の価値、聖書の宗教的価値」において、すでにこう述べられている。「聖書は、その本質において、「父なる神」と「子なるキリスト」と人間の関係、すなわち、福音のまこと、神の啓示を説き明かしている書である。福音のまこととは、聖なる超越的神が、罪を犯して罪に悩む人間を救うために、みずから人間の形体となって現実界に降り、人間に救いを示すことによって、神の御意を人類に示したことを意味する。すなわち、福音のまこととは、「父なる神」がみずからを人類に啓示する働きにほかならない」(48頁)と。

執筆者は、基督教学校教育同盟編『聖書教科書教授用指導書・高校用』創元社(1961)(3-47頁)の中で、「『福音』の意味がわかれば、本書の目的の大半は達せられるという程大切である」(5頁)語っている通り、歴史的記述に終始しがちないわゆる『聖書概論』方式を避け、聖書を「神の啓示の書」とみなし、啓示の種類によってその内容を説明しようとしている。

このような執筆方針は、編集委員会の判断に基づくものだったのだ

ろうか。それとも執筆者個人の主張だったのだろうか。いずれにせよ、このような教科書が作られ、少なくとも 1989 年まで使用されたことは確かである。キリスト教主義学校と教会の関係が変化して行く中で、はたして教育現場はこの余りに教理的聖書神学的教科書に戸惑うことはなかったのだろうか。

4 前項で紹介した『聖書教科書教授用指導書・高校用』には、さらに次のような記述も見られる。「聖書教師は、キリスト教の優越性を信じ、何故にキリスト教は、他の宗教に優越しているかを説明しなければならない」(6 頁)。この指摘は何を意味しているのだろうか。課題に対する解答についても、「課題の解答は、各人によって、その与え方が幾分異なるかも知れない。解答の与え方は幾分異なることがあるかも知れないが、その解答が正統的信仰から離れてはいけない」(23 頁)と述べ、正統的立場に立って教えるべきことを強調している。執筆者はなぜあえてこのように語ったのだろうか。当時の聖書科をめぐる状況を、建学の精神の実践及び教会との関連で多角的に検討する必要がある。

5 「新高校一年用」という表記は、『聖書教科書・教師用書』(1959 年)の 22 頁から引用したもので、教科書それ自体には特に記されていない。この教科書は、高等学校において初めて「聖書科」にふれる生徒を対象にしている。教育現場の要望に答えようとした結果と思われる。

(5) 高等学校用, 高校一年用, 基督教学校教育同盟『教会の発展  
— 聖書教科書 V —』新元社

a. 1959 (昭和 34) 年 4 月 5 日初版発行, 90 円, 143 頁 (使徒時代年表, 聖書名略号一覧, 地中海沿岸地方図総計 5 頁分を含む), 44×14 (1 頁 616 字), 巻頭写真 1 枚 1 頁

b. 月浦利雄, 竹井一夫

c. 目次

序論

一 使徒行伝の時代的背景, 二 使徒行伝の成立 (使 1・1-2, ルカ 1・1-4)

第一編 エルサレム教会の成立とその周辺への発展

第一章 イエスの死と復活 1 イエスの死とでしたちの困惑 (ヨハネ 21・1-25, ルカ 24・33-53), 2 イエスの復活 (使 1・3-5), 第二章 エルサレム教会の成立 1 イエスの昇天と使徒たちの待機 (使 1・6-26), 2 聖霊降臨 (使 2・1-13), 3 ペテロの説教 (使 2・4-42), 4 エルサレム教会の生活 (使 2・43-47, 4・32-37), 第三章 エルサレム教会の活動 1 ペテロたちの活動 (使 3・1-5・42), 2 ステパノの殉教 (使 6・1-7・60), 3 サウロの出現 (使 7・58, 8・1) —— 1 タルソ (使 21・39, 22・1-22), 2 ローマ市民権 (使 23・22-29, ピリピ 3・1-6), 3 パウロの教育 (使 22・3, 26・4-5), 4 迫害 (使 7・57-58, 8・1-3, 9・1-9, 22・4-5, 26・9-11, I コリ 15・9, ガラ 1・13, ピリピ 3・6), 第四章 エルサレム教会の発展 1 ピリポのサマリヤ伝道 (使 8・4-40), 2 サウロの回心と召命 (使 9・1-30, 22・3-21, 26・9-18, ガラ 1・2-17, ピリピ 3・6, I コリ 15・8-10, II コリ 4・6), 3 ペテロの活



動（使 9・31-11・18），4 アンテオケ教会とバルナバ（使 11・19-30），  
5 ヘロデ王の迫害（12・1-25）

## 第二編 キリスト教会の世界的発展

第一章 パウロの第一伝道旅行 1 アンテオケ教会の異邦人伝道（使 13・1-3），2 クプロ伝道（使 13・4-12），3 ガラテヤ地方の伝道（使 13・13-14・28），第二章 使徒会議 1 アンテオケ教会での紛争（使 15・1-5），2 福音と律法の問題（ガラ 2・15-21，ローマ 3・21-31，使 15・6-21），3 会議・その後（使 15・6-35），第三章 パウロの第二伝道旅行 1 ビリピ伝道（使 16・11-40），2 テサロニケおよびベレヤ伝道（使 17・1-15），3 アテネ伝道（使 17・16-34），4 コリント伝道（使 18・1-17），第四章 パウロの第三伝道旅行 1 エペソ伝道（使 19・1-41），2 トロアス伝道およびミレトでの別れ（使 20・1-38），第五章 ローマへの道 1 エルサレムでの逮捕（使 21・1-23・22）2 カイザリヤでのパウロ（使 23・23-26・32），3 ローマへ（27・1-28・31）

結語（コロサイ 1・15-20）

### d. 特質

1 執筆者は月浦利雄と竹井一夫と記されている。基督敎学校教育同盟編の教科書に二人の名前が登場するのは今回が初めてである。二人とも東北学院中学高等学校の教師であり、このシリーズの編集委員である水野和夫も東北学院中学高等学校の教師である。したがって共著という表記に特別驚く必要はない。

ところが、月浦利雄は長い間同校の校長職をはじめとする要職にあり、「月浦英語」と言われる独自の英語教授法を開発し、実践した人物

である。月浦は後に東北学院の理事長職にもつき、学内外において非常に大きな影響力をもっていた。他方、竹井一夫は、生涯、中高の聖書科教師であると同時に、藤一也のペンネームをもって活躍した文人であり、文学研究者である。多くの著作を残しており、後に『東北学院百周年史』の編纂にも携わっている。

二人のこの経歴から考えて、「共著」という表記には簡単に首肯できないものがある。事の真偽は教科書の内容から判断するしかないが、基督教学校教育同盟編『聖書教科書教授用指導書・高校用』創元社(1961(昭和36)年)(49-90頁)の内容から判断するかぎり、竹井一夫の「単著」の可能性が高い。その中で紹介されている研究書のレベルがかなり専門的なものだからである。

では、なぜ共著となったのか。残念ながら、今のところ資料の整理を待つしかない。しかし月浦の名前が載ることにより、東北地方の基督教主義学校がこの教科書シリーズを受け入れやすくなったことは確かであろう。この教科書シリーズの販売部数と受け入れ校のリストが整理されるならば、この点も確認できるかもしれない。

2 この教科書の特徴のひとつは、「使徒行伝」の本文をその時代背景の中で説明しようとする姿勢を前面に出していることにある。この方法が有効であるためには、学習者の中にある程度「使徒行伝」の話が物語として定着していること、つまりすでに「使徒行伝」について一通り学んでいること、さらに過去の事件の歴史的背景に興味を持つ準備ができていること、例えば世界史の知識をある程度もっていることが要求される。仮にそれらの準備が整っていたとすれば、この教科書を用いた授業は学習者にとって魅力的な時間となったはずである。

例えば、「タルソ」(39-42 頁),「当時の党派もしくは宗派について」(46-48 頁),「アンテオケ教会とバルナバ」(63-66 頁),「皇帝礼拝について」(70 頁),「密儀宗教について」(111-112 頁)等の項目は、実に詳細な説明を展開している。

3 執筆者は、「使徒行伝」ならびにパウロの手紙の本文に関する文献批評学的検討を踏まえた上で、さらにその本文が語るメッセージに留意しつつ、記述しようとしている。特に「使徒行伝」の本文にみられる文献批評学上の諸問題をコンパクトにまとめ、しかも自らの見解を無理なく展開している。注意深く読むと、これらの諸問題の謎解きの跡をたどることができ、魅力あるものに仕上がっている。教育現場で問題が起こるとすれば、この教科書の魅力をはたして消化仕切れたかどうかということであろう。

4 d.1 の項で紹介した『聖書教科書教授用指導書・高校用』の 89 頁には、次のような興味ある記述が見られる。『「結語（コロサイ 1・15-20）」頁数の上からと同時に、この教科書では使徒行伝の本文を学ぼうとした立前から、この項目は殆ど聖書科カリキュラム（1957 年）の 72-73 頁の内容の概説にすぎない。』この記述から、本書は、すでに纏められていた『聖書科カリキュラム』（1957 年）に基づいて執筆されていることが明らかになる。残念ながら現在のところ、論者の手元にはこの資料がなく、それとの関連でこの教科書の内容を検討することはできなかった。今後の課題である。なお前述の通り、茂義太郎も、『聖書教科書教授用指導書・中学用』において、基督教学校教育同盟によって作られたカリキュラムに言及しているが、その作成年は「1959（昭和 34）年」（97 頁）とされている。両者の違いは何を意味するの难道ろ

うか。高校用と中学用では違っていたのだろうか。これも今のところ不明である。

5 「高校一年用」という表記は、『聖書教科書・教師用書』(1959 年)の 35 頁から引用したものである。

(6) 高等学校用, 高校二年用, 基督教学校教育同盟『キリスト教と人生 — 聖書教科書 VI —』新元社

a. 1959 (昭和 34) 年 4 月 1 日初版発行, 90 円, 126 頁 ( 聖書名略号一覧 1 頁分を含む ), 44×14 (1 頁 616 字), 巻頭写真 2 枚 2 頁

b. 溝口靖夫

c. 目次

第一編 信仰と人格

第一章 聖書の人間観(創 1・27), 一 被造性, 二 罪と死, 第二章 信仰と新生(ヨハネ 3・3), 一 人生観, 二 悔改めと信仰, 三 キリストによる救い, 第三章 人格の形成(エペソ 4・22-24), 一 献身, 二 祈り, 三 聖化, 四 苦難

第二編 信仰と社会

第一章 新しいいましめ(ヨハネ 13・34), 一 聖書の社会観, 二 新しいいましめ, 三 愛神愛隣, 第二章 家庭(使徒 16・31), 一 愛の学校, 二 男女, 三 結婚, 四 親子, 五 兄弟姉妹, 第三章 社会(ピリピ 4・19), 一 労働, 二 経済

第三編 信仰と世界

第一章 国家(マルコ 12・27), 一 国家観, 二 権力と法, 三 カイザルのものと神のもの, 第二章 世界(マルコ 16・15-16), 一 人類

の世界、二 世界史と文化、三 平和、四 教会と神の国

d. 特質

1 執筆者溝口靖夫はすでに二冊の教科書を書いている。ひとつは、1950（昭和25）年に発行された『キリスト教の主要思想』（創元社）であり、これは高校三年生（前期）を対象としている。もうひとつは、片山正直と共同執筆した『キリスト教の要義』（創元社、昭和26年）である。これらの書物の目次と比較すると、本書の内容はまったく新しいものである。つまり前の二冊が組織神学の分野を扱っているとすれば、本書は明らかにキリスト教倫理の領域に属する。したがってこれまで出版された教科書の中で本書に近いのは、1949（昭和24）に発行された本宮彌兵衛著『キリスト教と文化』（創元社）である。両者を比べると、具体的な展開の順序がかなり異なっていることが分る。本宮著『キリスト教と文化』では、次のようになっている。つまり、政治→経済→実業→芸術→家庭→国家及び世界→奴隷解放運動→防犯運動→禁酒運動→児童保護運動→医療事業→教育→労働問題。これに対し『キリスト教と人生』では、家庭→社会→国家→世界、となっている。

2 本書は一体何年生を対象にしているのであろうか。「聖書教科書 VI」という表記から判断するかぎり、高校三年生用とみなすのが常識である。ところが、このシリーズにはさらに「聖書教科書 VII」があるため、仮にこの最終刊を高校三年用と考えると、もうひとつの可能性が出てくる。つまり、高校二年生用とみなす可能性である。事実、本宮著『キリスト教と文化』は高校二年生用（後期）であった。論者がこの問題に決着をつけることができたのは、次のような著者自身の発

言に出会ったときである。「四 本教科書、殊に一「信仰と人格」の部は、第三学年の『キリスト教の要義』と共通の事項があるので、本書ではなるべく人間をテーマとした。神、キリスト、聖霊、教会の本質、天国(永世)、あるいは神の国等の詳論は、第三学年に譲ってあるので、本学年では、その方面を比較的簡単にして、卒業前の最後の年に徹底的にこれに触れるようお願いしたい」(基督教学校教育同盟編『聖書教科書教授用指導書・高校用』創元社、1961(昭和35)年4月10日、141頁)。また同書の94頁には、「われわれの課程の対象としての高校第二学年の生徒たちは、いまや最も真剣に世界と人生について考える年齢にさしかかったのであって、……」という記述も見られる。それゆえ本書は、確かに高校二年生を対象として執筆されたと言えることができる。

3 キリスト教倫理において常に問題になるのは、個々の具体的事象にどのように対処するかということだけでなく、啓示と文化の関係を根本的にどのように考えているのかということである。教科書という、かなり制約された条件のもとで書かざるをえない書物からこの基本的理解をくみ出すことは、なかなか困難である。原理原則に関する議論は、読者の発達段階を考慮に入れた議論と基本的に異なるからである。その点、執筆者が教師のために纏めた「指導書」は、はじめから大人を相手にしているという意味で、この原理原則に関する理解を率直に語っている可能性が高い。

前項で引用した、基督教学校教育同盟編『聖書教科書教授用指導書・高校用』(創元社、1961(昭和35)年4月10日)の中で、溝口靖夫が担当しているのは93-141頁の部分(「キリスト教と人生」)である。

それは、目次を除くと全体で49頁分になる。1頁に入る文字数が1,248(26×24×2)字であるとする、全体で61,152字になる。本体の教科書の7,700字と比べると、これは決して少なくない量であり、著者は自らの見解を披瀝することができたはずである。

この「指導書」の中から、著者の立場を明確に示していると思われる文章を幾つか引用しておく。

「われわれが聖書を学ぶのは、単に知的にこれを理解するためではない。他の学科においても、知的と同時に教育的な人格形成ということが目指されているのである。聖書科においては特に、聖書を学ぶ事によってひとりひとりが神のみ旨にふさわしく生きることができるように導かれるためである」(93頁)。

「アダムの子であるわれわれが、自らの罪を悔改め、イエスを救い主として告白することのできるのは聖霊の働きによるほかはない。この意味において、教えつつ祈り、祈りつつ教える以外に聖書教授の方法はない」(96頁)。

「すなわち、福音と文化の両者はその根柢において非連続の関係にあるが、それだけでは福音は成立しない。神の言葉が福音となるためには、非連続の文化と連続の関係にならねばならない。しかもそれは、否定の関門を通ることなしには不可能である(ピリピ2・6-7)。ここに、神の言葉と文化との相互否定媒介的な関係が理解されるであろう」(113頁)。

4「高校二年用」という表記は『聖書教科書・教師用書』(1959年)の42頁から引用したものであり、同頁において著者も「聖書科カリキュラム」に従っていることを明記している。

(7) 高等学校用, 高校三年用, 基督敎学校教育同盟『キリスト敎の  
要義 — 聖書教科書 VII —』新元社

a. 1959 (昭和 34) 年 4 月 5 日初版発行, 90 円, 126 頁 ( 聖書名略  
号一覧 1 頁分を含む ), 44×14 (1 頁 616 字), 巻頭写真 1 枚 1 頁

b. 片山正直

c. 目次

福音

一 福音の宗教 (マタイ 6・33, I テモテ 6・12), (マルコ 1・14, 15),  
二 福音の意味 (ローマ 14・23, 6・23), (マルコ 2・17, ローマ 1・  
16), 三 福音の成立 (ルカ 4・43, 22・42, ガラ 1・4), (ヨハネ 14・  
26, ローマ 8・5, I コリ 2・12)

神

一 神の存在 (ヨハネ 1・18, 14・6, 9), (マタイ 6・9, 10, ヨハネ  
4・24), 二 創造の神 (創 1・1, 黙示録 4・11), (ヘブル 11・3), 三  
義と愛の神 (詩 98・2, ローマ 1・17), (マタイ 18・12-14, I ヨハネ 4・  
8, 9)

キリスト

一 受肉 (ルカ 2・10-11), (ヨハネ 1・14), 二 十字架 (マタイ 16・  
21, I コリ 1・18), (I コリ 1・23, ローマ 5・8), 三 復活 (使徒 2・  
24, I コリ 15・14), (ヨハネ 11・25, I ペテロ 1・3)

聖霊

一 聖霊の存在 (ヨハネ 15・26, 使徒 1・8), (I コリ 2・11-12, II コ  
リ 3・17), 二 聖霊の作用 (I コリ 12・3, ローマ 8・14-15), (ローマ  
8・9, 8・11, ガラ 5・22-23, I コリ 12・4-11), 三 聖霊と教会 (使



徒 20・28, エペソ 1・23, コロサイ 1・18, I コリ 12・27), (マルコ 16・15, マタイ 28・19, ルカ 22・19)

#### キリスト者の生活

一 信仰 (ローマ 1・17, ヘブル 10・39), (マルコ 1・15, ルカ 9・23, ヤコブ 2・17, I テモテ 6・12), 二 愛 (I ヨハネ 3・16, ルカ 10・27), (ルカ 10・27, ヨハネ 13・34), 三 希望 (ローマ 8・24-25, II ペテロ 3・13), (ローマ 8・21, II ペテロ 3・9, ローマ 11・36)

#### d. 特質

1 片山正直はすでに二冊の教科書を執筆している。ひとつは、『キリスト教の世界観』（創元社，1949（昭和24）年，高校三年後期用）であり，他は，溝口靖夫と共同執筆した基督教学校教育同盟編『キリスト教の要義』（創元社，1951（昭和26）年）とその改訂版『キリスト教の要義』（新元社，1958（昭和33）年）である。1951年版と1958年版の内容がほとんど同一であることについては，すでに指摘した通りである。今回取り上げている『キリスト教の要義 — 聖書教科書 VII —』は，サブタイトルを除くとこれら二つの教科書と同じ表題であり，その目次の構成の大枠も同じである。つまり，福音→神→キリスト→聖書→キリスト者の生活，という構成になっている。

ただし，「神」の項目には違いがみられる。1958年版では，一 創造の神，二 主なる神，三 父なる神，となっていたのが，1959年版では，一 神の存在，二 創造の神，三 義と愛の神，となっている。両者の発行年の差はわずか一年であるが，すでに1951年版が存在することを考えると，その間に八年の期間があり，内容を再検討する時間は十分にあったと思われる。したがって1951年版ないし1958年版との相違は，

共同執筆から単独執筆に代わったことによって生じた可能性がある。変更された部分は、もともと溝口が担当していたと想定される。溝口靖夫著『キリスト教の主要思想』（創元社、1950（昭和25）年）の目次は「神 一 創造の神、二 支配の神、三 主なる神」で始まっており、これが1951年版と1958年版に受け継がれた可能性が高いからである。もしもそうだとすると、それらと1959年版の相違は決して小さな事柄ではなく、片山正直にとって自らの考えを表現するうえで必要不可欠なものであった。片山の考えとは、その目次が語るように、まず「福音」に言及し、その後で「神」について語ることである。この構造は、片山の最初の教科書である『キリスト教の世界観』の目次のうちすでに現れていたものである。彼はそこでも、「福音」から語り始めている。

さらにわれわれのこの見解を補強するのは、片山自身の次の言葉である。「第一章の「福音」は、いわば本書の礎石である。いいかえれば、それは本書の総主題もしくは主動機であって、後の主題はすでにこの中に含蓄されているのである。……そこで、この教科課程を担当される方々に希望したいことは、何よりも最初の「福音」の一章を、十分に徹底的に教えられることである」。これは、基督教学校教育同盟編『聖書教科書教授用指導書・高校用』（創元社、1961（昭和36）年、非売品）に収められている片山正直「キリスト教の要義」（143-206頁）の「総論」（146頁）からの引用である。

2 教理の問題を扱うこの種の教科書に常に付きまとう問題は、「高校三年生にとって、その内容が難しすぎるのではないか」という問いである。だからこそ、高校二年生用の教科書が二種類できてしまった

のではないかと考えることもできる。いずれにせよ、執筆者はこの問題をどう考えていたのか。幸いなことに、われわれは直接執筆者の声を聞くことが出来る。前項の最後に引用した『聖書教科書教授用指導書・高校用』の中で、片山はこう述べている。「中学一年から高校二年まで、あるいは高校に入学してから二年間、いろいろな側面からキリスト教について学び、いまや高校の第三学年に進んだ学生に、キリスト教の信仰の中心内容を教えることが、本書のめざすところである。題して『キリスト教の要義』というのであるが、必ずしもキリスト教の信条や教義を、そのままに学生に教示しようとするのではない。むしろ、信条や教義の成立以前の、いわばなまの素朴なキリスト教の信仰内容——すなわち『聖書』に示されている信仰内容を、学生とともに学び考えることを、目的としているのである。…… 彼等〔高校三年生〕の年齢は、心理学的にみて宗教への回心の時でもある。自我に目覚めた彼等は、宗教に対して無関心ではないであろう。このような意味において、彼等にキリスト教の本質内容を教えることは、きわめて重要であるといわねばならない。そして『キリスト教の要義』は、彼らの理解に困難ではないであろう。それどころか、学生はここにはじめてキリスト教の本質内容、その根本問題に出会い、多少とも学問的な反省に立ち向かうであろう」（145 頁）と。

はたして教育現場はこの教科書を通して執筆者の思いを共有できたのであろうか。これは別に問われなければならない問題である。

3 本書には、1951 年版と 1958 年版にみられない工夫がほどこされている。それは、全体の章立てとは別に、全体を三十回の授業で終了できるように、通し番号がふられている。具体的カリキュラムを意識

した構成である。

4 また『キリスト教の要義』の目指すところは、結局、『聖書』を学ぶことに他ならないと述べているように（前掲『聖書教科書教授用指導書・高校用』147 頁参照）、執筆者は、必ず引用聖句を参照するように求めている。これが、「聖書科」に必ず伴う「聖書と教科書の関係」という根本問題に対する執筆者の基本的見解である。

5 「高校三年用」という表記は、『聖書教科書・教師用書』（1959 年）の 51 頁から引用したものである。

### 残された課題

1 すでに指摘した通り、『聖書教科書・教師用書』（1959 年）及び『聖書教科書教授用指導書・中学用』（1961 年）における関根文乃助や茂義太郎等の記述から、七巻からなる『聖書教科書』シリーズの編集に際して基督教学校教育同盟編『聖書科カリキュラム』（1959（昭和 34）年）が存在していたことが分かっている。しかしわれわれはこの資料を手しておらず、この『聖書科カリキュラム』と、実際に執筆された七巻の教科書を対比することはできなかった。なお、『聖書科教授用指導書・高校用』における記述では、そのカリキュラム発行の年代が 1957 年となっており、中学用と高校用ではちがっていた可能性もある<sup>(2)</sup>。

2 また III 巻を担当した茂義太郎は、その『聖書教科書教授用指導書・中学用』の中で、次のように述べている。「さらに、いま一つつけくわえておきたいことは、この教科書の用い方である。私はこの教科書は、教案編さんの委員会の申合わせによって、いままでのような、読

本式のものではなく、ワークブック式のものとしてかいたことを申上げておく」(98頁)。ここから、正式名称は不明であるが「教案編纂のための委員会」が存在したこと、またその委員会の席上、従来の「読本式」ではなく「ワークブック式」の教科書を目指すことが確認されたことが分かる。そしてこれは、この七巻シリーズ全体をこの最初の意図から読み直すべきことを示唆している。また関根文之助は「第一に留意していただきたいことは、聖書そのものを読ませ、親しませ、学ばせるという方法であって、本書は、そこに主眼を置いているということである」(51頁)と述べている。二人の記述から推測すると、「教案編纂のための委員会」では、聖書そのものが教科書であること、そして教科書は、生徒が自ら聖書を読み、そして理解するための「指導要録」(98頁)にすぎないことを確認したようである。

このような確認がなぜこのときになされたのか。これを知るには議事録の整理を待つしかないが、いつの時代にも、聖書の位置づけは「聖書科」の具体的展開に関わる根本問題であり、「聖書科の教科書」の内容を論ずる際にも常に問われなければならないテーマである。なお、『聖書科カリキュラムのありかた 1956』において、すでにこの方向性が示されていたことはすでに指摘した通りである。

では、少なくとも二人の語る「ワークブック方式」を教科書そのものから読み取ることができるであろうか。残念ながら、論者の判断では、これまでのシリーズと際立った違いはみられない。その理由は、『聖書教科書』と銘打った時点で、その方向性は決められてしまうからである。「教科書」ではなく「補助教材」とであるというのであれば、そのように明記し、分量をさらに減らさなければならないであろう。

3 教科書研究の難しさは、その資料が残りにくいという現実にある。責任をもってそれらを保管する機関が常設されていないかぎり、今後も同じことが繰り返されるであろう。一般の教科書の場合と異なり、キリスト教主義学校においてのみ使用される「聖書科の教科書」の保管を一般の図書館等に期待することは出来ない。キリスト教学校教育同盟も自覚的にそのための努力を重ねてきたとは言えない。今回取り上げたテキストは、かろうじて残されていたものにすぎない。論者は、初版、再版、そして最終版といった、当然残されているべきものに目を通さずに、論述せざるをえなかった。特に、その教科書が実際いつ廃刊になったのか、これはほとんど分からなかった。その教科書が教育現場でどのように受け入れられたのかを知る一つの手がかりは、それが使用された期間にある。これらの問題解決は、それらの事実を示す資料の整理に期待するほかない。特に、毎年度の発行部数と購入希望の記録は理事会記録の中に残っている可能性が高い。戦前のケースはすでに紹介した通りであり、学校別の購入記録が残されていた。

4 今回の七巻シリーズの執筆者の中で、初めて聖書教科書編纂に加わった人物は本田正一、月浦利雄、竹井一夫の三人だけであり、すでに述べた通り、実質的には本田と竹井の二人だけである。五巻の教科書は、すでに執筆経験のある人物が担当している。その結果、前の経験が生かされ、より読みやすいものに仕上がっていることは確かである。少しずつ改善されているからである。

しかし他方、代わり映えないという印象も免れない。もしも思い切って全員を入れ替えていたら、どうなったであろうか。新しいタイプの教科書が生まれる可能性があったのではないのか。たとえ、この

シリーズまでは、何らかの事情で仕方なかったとしても、キリスト教学校教育同盟は、このシリーズの後に、もう一度大幅に執筆者を入れ替えて、新しい企画を立ち上げることができたのではないのか。それとも、やりたくてもどうしてもできない事情があったのだろうか。新しいキリスト教教育同盟編の教科書が発行されたのは、なんと1993年に入ってからである。われわれの取り上げたこの七巻シリーズが発行されてから、すでに34年も過ぎていた。しかもそれは七巻ないし六巻ではなく、わずか三巻からなる教科書シリーズである。そしてこの新しい教科書でさえ、本年ですでに発行以来15年の時がたっている。

教育現場はもう「聖書教科書」を必要としないほど変化しているのだろうか。それともこの間に他の出版社から発行された「聖書教科書」で間に合っているのだろうか。実態調査を試みる必要がある。

5 どの段階で、この企画シリーズが六巻ではなく七巻と決まったのか。残念ながらこれもよく分からない。しかしなぜ七巻になったのか、それは幾分推測可能である。ひとつの手がかりは、五巻に当たる『教会の発展』の対象学年を吟味することである。当初、論者はその内容から高校二年生を想定していた。この教科書は福音書の学びを終えていることを前提としているからである。また、このシリーズには『キリスト教史』に当たる巻がないため、この五巻がその代わりとなっている可能性も推測してみた。さらに六巻と七巻は、キリスト教倫理と組織神学の分野に属しているため、それらを高校二年生と三年生に別々に学ばせることは考えにくかった。

ところが、論者のこれらの想定はすべてはずれていた。それは、基督教学校教育同盟編『聖書教科書・教師用書』（新元社、1959（昭和

34) 年1月25日発行、非売品) という資料が出てきたからである。これには、『教会の発展』は高校一年用、『キリスト教と人生』は高校二年用、『キリスト教の要義』は高校三年用と明記されている。そして『聖書入門』は「新高校一年用」とされている。つまり、高校一年生用の教科書が二種類あり、この「新高校一年生」とは、高等学校の段階で初めて基督教教育にふれる生徒を指しているようである。もしこれが事実であるとすれば、全体で七巻という企画は、すでに中高一貫教育が崩れかかっていた現実を反映していたことになる。

以上のように、論者の当初の推論は完全に間違っていたのだが、では、「聖書科カリキュラム」を作成する段階で、『キリスト教史』の必要性は論じられなかったのか、という新たな疑問が生じてくる。神学的バランス感覚からみると、この分野が欠けていることは、いかにも未成熟の感がする。高校生には所謂『世界史』の授業があり、それとの関連で『キリスト教史』の話は十分展開可能だったからである。この七巻シリーズには、結局『キリスト教史』の教科書は入らなかった。これがその特色であると同時にその限界である。全巻で八巻シリーズとして、その取捨選択を学校側に任せる道も可能だったはずである。

6 第Ⅰ巻『キリスト教入門』の執筆者本田正一は、『聖書教科書教授用指導書・中学用』においてこう述べている。「一 キリスト教主義学校は、日本宣教の使命を達成するために、教会のわざとして、特別な目的をもって創立された学校である。二 キリスト教主義学校は、教会と共に、あらゆる困難にたえて、建学の精神を成就しようとしたかしてきた。」「キリスト教主義学校の歴史は、建学の精神を守り抜いた歴史である。」「キリスト教主義学校が目ざす目標は、教育基本法に示さ



れている「人格の形成」をキリスト教信仰によって実現することである。」「基督教主義学校に入学したのは、神の摂理によっている。」「キリスト教主義学校教育では、まず、神を学び、イエス・キリストを学び、その上に教科活動を盛り上げる。」キリスト教教育とは、「キリスト教を教え、キリスト教的情操を養う教育ではなく、キリスト教信仰に基づき、キリスト教的人間を形成することを目標とする教育活動」である。

ここには、キリスト教主義学校と教会の関係、教育基本法との関係、キリスト教教育の目標等が明確に語られている。これらの理念は、本シリーズの編集委員会が共通理念として確認したものだったのだろうか。それとも、本田個人の危機意識から生まれたものだったのだろうか。いずれにせよ、これらの発言が本シリーズの第Ⅰ巻の冒頭でなされた意味は大きい。その後のキリスト教主義学校の歴史は、様々な理由でこれらの理念がますます希薄化して行く歴史だからである。

## 註

- (1) 佐々木勝彦「基督教教育同盟会編『基督教主義中学校及び高等学校宗教教科書』(1949-50年)の内容と特質」, 東北学院大学論集『教会と神学』第47号, 2008.11. と佐々木勝彦「基督教教育同盟会編『基督教主義中学校及び高等学校宗教教科書』(1951年)と基督教学校教育同盟編『基督教主義中学校及び高等学校宗教教科書』(1956-58年)の内容とその特質」, 東北学院大学論集『教会と神学』第48号, 2009.3. を参照。
- (2) この当時の聖書科カリキュラムに関しては、次のような資料が残されていることについては、すでに指摘した通りである。① 基督教学校教育同盟発行『聖書科カリキュラムのあり方 1956』(1956(昭和31)年7月23日発行, 111頁, 定価100円), ② 基督教学校教育同盟編集兼発行者『聖書科カリキュラム, 宗教教科書, 関連対照表—中学用—』(1958(昭和33)年1月10日発行, 8頁, 非売品), ③ 基督教学校教育同盟編集兼発行者『聖書科

カリキュラム，宗教教科書，関連対照表—高校用—』(1958(昭和33)年2月20日発行，6頁，売品)，④ 基督教学校教育同盟発行『聖書科カリキュラム(Aコース)指導要領』(1959(昭和34)年5月20日発行，74頁，定価100円)。